

原著論文

大島鎌吉のスポーツ思想に訊く (3)  
—日本のオリンピック運動という視点において—  
Discussion on Kenkichi OSHIMA's Sports Ideas (3)  
: A Viewpoint on the Olympic Movement in Japan

伴 義孝<sup>1)</sup>

Yoshitaka Ban<sup>1)</sup>

Abstract

The goal of the Olympic Movement was not simply to host the Olympic Games. It was fundamentally a cultural movement aiming to promote a 'youth development program' that held a 'philosophy of peace' in high regard. For Japan, the Olympic Movement was an aspect of foreign culture that arrived in the early 20th century from Europe. Perhaps for that reason, it is hard to say that the essence of the Olympic Movement has been adequately understood in Japan. However, there is one exception: the Olympic Movement of Kenkichi Oshima. This paper seeks to examine the sequence of events leading up to the bidding to host the 18th Olympic Games in Tokyo in 1964, with a focus on the Olympic Movement in Japan as promoted by Kenkichi Oshima.

キーワード 対決 布石 不作為 スポーツする心  
confrontation, preparatory steps, forbearance, sport mind

1. 緒言

1966年の大島随想が1947年に自ら発祥させた日本の新しいレクリエーション運動の抱負を述べて「私の使える武器(新聞紙面)で戦った」と書く。この十数文字は近代化路線の負の連鎖に対決する大島鎌吉(1908～1985)の生き方を語っている。大島がレクリエーションに注意しだすのは「オリンピック運動に強い関心をもっていた」戦前のことである。当時「第一線の競技者だった頃」は「あの激しい闘争が、オリンピック平和に結びつくといった理念が理解し難かった」と振り返る。

青年大島は「疑問を解く手がかり」を当時のオリンピック憲章に見出す。即ち憲章に定める「アマチュア」は「レクリエーションとしてスポーツを愛好する者 participation in sports is nothing more than recreation」となっていた。またオリンピックへ「参加を許されるのはアマチュアに限る」であった。ここで大島の問う「アマチュア」とは、アマチュア論議の追及してきた階級闘争の指摘する概念問題ではなく、ラテン語の原義「愛好する amator」を意味する。そして1966年随想が1962年以前のオリンピック憲章に内意されている「アマチュアとレク

<sup>1)</sup> 関西大学名誉教授(大島鎌吉スポーツ文化研究会主宰)

*Kansai University Professor Emeritus (Study Group for Oshima's Sports Ideas)*

リエーションの問題」に留意するのであれば「オリンピック平和運動の基調」が鮮明になると説く。このように大島は根源的な実践論理「愛好する」に立脚するとき先見的に「スポーツ」と「レクリエーション」と「オリンピック」を等質の観点から捉えた。ここに原点問題を追究すべき課題がある。

本稿では、1962年の大島邦訳書『ピエールドクベルタン オリンピックの回想』の教示する「クーベルタンの意志」と「大島実践論」を随所に配し、そこへ新聞と文献から検証する現実把握と本稿の見解を相乗させて考察する。併せて体育学研究の課題も検める。

## 2. 近代化路線への対決

1892年11月25日、29歳のフランス青年クーベルタンが講演会で「オリンピックの復活」を呼びかけた。聴衆は「賛成し成功するように望んだ」のだが真意を誰も理解してはいなかった。そのため1931年になって「絶対的な無理解は融けなかった」と40年も続く「孤独な哀切」を回想する。同時に「1500年前の精神と内面的本質と原則を説くのは困難だった」とも吐露した。（大島邦訳書 p.17）

クーベルタン回想は1931年の刊行である（Navacelle）。そこで彼の苦渋の回想「終生孤独でやり場のない立場に追いやられた」を読み解くにしても、近代化の路線変遷「現実把握」を無視したのでは不可能になる。クーベルタンの曾甥孫ナヴァセユが補足する。1936年のクーベルタンは『オリンピックの回想』の最終章『未完成交響曲 La Symphonie inachevée』を書き始めていた。しかし翌年9月2日に74歳で逝去したため未完である。絶筆ノートが「私のオリंपィズム Olympism はまだ半分も約束されていない」と明かす。遺志は誰かが継承し具体化するほかない。大島邦訳書「訳者のことば」（1962b）に訊く。

クベルタンはどんなに艱難辛苦して近代オリンピック競技を復活したか。これを現代の世界最大の文化事業に発展させるのに、どんな布石を打ったのか。

実は大島邦訳書の1962年出版自体が日本における布石なのである。その大島がクーベルタン思想の精神や理想について日本では専門家にさえ「あまりよく知られていない」と点検した。斯くして1964年の第18回五輪東京大会を二年前にして問題を提起する。

古代ギリシャのオリンピック思想は一時人類の歴史の中から消えた。だがクベルタンという一人の人間の精神によって再び近代に蘇生した。ここに現代に生きるわたしたちは、体育・スポーツをどう考え、どう意義づけるか、新しいしかも厳粛な課題の前に立たされた。（同前）

日本では根拠「近代に蘇生させた」も提言「厳粛な課題」も曖昧に放置されてきた。ところが19世紀後半の西欧では近代化路線に対決する反省潮流「文化運動」が思想的実践的に始まっていた（伴、2017a）。ひとつに「生の哲学運動 Philosophy of Life Movement」があつて、他に「オリンピック運動 Olympic Movement」がある。19世紀末の米国での「レクリエーション運動 Recreation Movement」も同根である。近代化路線は進歩主義と経済成長を助長する反面、観念主義、合理主義、主知主義を流布させる。また都市化をもたらし生活世界を激変させる。実に上記三つの文化運動は時代趨勢に対決して世界史に初登場した生命原理の世直し運動なのである。

実のところ近代オリンピックの発足当初には「オリンピックのもつ苦悩」は存在しなかった。なぜなのか。1949年の大島が謂う。

近代オリンピックは当時の社会環境の中に必要が生んだ自然児だったのである。しかるに第一次世界大戦（1914 - 1918）終了後、やがて問題が擡頭してきた。（大島、1949a、p.55、傍点補注今次）

ところで「自然児」は育て方を間違うと腐敗する。近代化路線の産出する最大の過誤は戦争で、最大の犠牲者は青少年である。近代オリンピックはこの構図から青少年を救出するために創出された。その真髓は、「単なる国際的な選手権大会」としてではなく、「生命の

門口にさしかかった若い世代の活動欲の形象」を祝福する仕組み「祭典」にある（大島邦訳書 p.80）。しかるに1892年の聴衆は生命原理の自然児を裏腹にも「見世物か利用物」に仕立て上げ、知性原理の対象論理「実利主義」で捉え賛同したのである。蓋し近代化の特性はこの知性原理への偏重依存にある。1931年のクーベルタンがその蓋然性を解説する。

「…大会は高尚な情熱をも低俗な情熱をも発散させる。大会は名誉の気高さと概念を発達させるが、同時に金銭に対する貪欲を発達させる。大会は騎士的でもあれば、賄賂の利くものでもある。人は、大会を、平和を確保するためにも利用できるが、戦争準備のためにも利用できる…」（大島邦訳書 p.29）

解説の各文節前段は近代オリンピック（自然児）の実践論理「理想主義」であって、後段は人心が対象論理「実利主義」で追求する象徴的事例である。かくも近代化路線は人心「ものの見方」をも功利志向へ馴化させる。クーベルタンはその窮極的な対象論理を腐敗の根源だと見做して軽蔑した。斯くして「騎士的精神と平和は近代民主主義が第一に要求している」と理想論を説く。このさい理想論とは横溢する腐敗構造に対決して青少年を救い出すための精神的基調にほかならない。

### 3. 戦勝国論理の不作為

この精神的基調を無視すれば、近代化路線に対決する思想的課題「オリंपイズム」と実践的課題「オリंपック運動」の実相は見えてこない。1949年の大島発問に訊こう。

政治的にも経済的にも鉄のカーテンや竹のカーテンを境として明らかに二つの世界が形成されつつある。この様相の中にはこの主張する二つの理論（戦勝国論理）にも感情的曇り（負の連鎖を放置する不作為）のあることをわれわれは認めなくてはならない。従って冷静にこれを批判する資格をもつものは敗れた日本であり、ドイツである（べきである）。（大島、1949a、p.54、傍点補注今次）

発問に先立つ問題意識に注目したい。

戦前戦中のあのゆがめられた日本人的な、また後進資本主義国家的な思想や感情を洗い落しているはずである。ある程度純粹な理性による批判が可能となっているのである。しかし外界（戦勝国）は決してそうでない。（同前、補注今次）

大島はこのように戦勝国論理が助長させる負の連鎖の放置を指弾する。1925年のクーベルタンも指弾した（大島邦訳書 p.14）。

「…商取引の場か、それとも神殿か！ スポーツマンがそれを選ぶべきである。あなた方はふたつを望むことはできない…」

そしてスポーツ「自然児」は「選択を迫られている」と詰問した。また青少年へ「自分でそのひとつを選ばなくてはならない」と期待を託す。斯くしてオリंपック運動は「青少年育成運動」を涵養促進することに大前提がある。このさい隠喩「商取引の場」は戦争に代表される負の連鎖を象徴しており、一方で「神殿」は平穩に涵養すべき自然児「スポーツ」を象徴する。近代戦争は第一次世界大戦を契機に加速化した。そのさい米国が兵器輸出国として巨万の富を築き世界に君臨しはじめる。こうして戦争をも一面的に是認し目的化させる近代化路線の矛盾が始まった。クーベルタンはこの矛盾を許さない。

近代化「進歩主義・経済成長」路線は、理想論「神殿」を埒外に押し出し、あらゆる領域で近代合理主義「商取引の場」を重点施策としてきた。だから近代オリंपックも「内部に破局的な要素」を抱えることになった。大島が愚痴すら交えて足跡を特筆する。

古代オリंपックの模写は近代オリंपックの始祖が永い歴史の変遷を無視して古代ギリシャの土のものをそのまま欧州の近代国家群のスクリーンに投じたということである。クーベルタンの情熱と偉功はノーベル賞受賞に値するものであったに相違ないが、その夢は現実と時代の進歩にその直視を欠いた点で、歴史家教育家としての彼の本領を疑わせるものが

なかったか。即ち模写が単なる模写に終わったため、ほんとうの模写にならなかった（大島、1949a、p.57、傍点今次）

さて「歴史の無視」と「単なる模写」は誰の責任なのか。1949年7月1日、近代化路線に潜む因習「悪貨は良貨を駆逐する」に対決する大島が、革新的論文「近代オリンピックの検討」を書いて日本状況を追及した。

スポーツが学生と一部特権階級の玩弄物になっていること。スポーツが国民のものではなく、一般のスポーツ観が自ら実践するものでなく専ら見るものであること。さらにスポーツ行政がピラミッドの底辺を白眼視して一途に選手であるピラミッドの先端のみ眺めていること。これらの歪められた形は一刻も早く矯正されなくてはならぬ。（p.59、傍点今次）

四十数日後の8月16日、日本の時代精神を戦前思想「追いつけ、追いこせ」へ逆戻りさせる事件が生じた。第二次世界大戦（1939 - 1945）のあと、最初の国際進出「全米水泳選手権大会」（ロサンゼルス）で招待選手古橋広之進が1500m自由形の驚異的な世界記録「18分19秒」を樹立した。古橋快拳は大島も絶賛したが、反動で日本のジャーナリズムが戦前論調「勝った、よかった」へ戻ったと批判する（大島、1949b）。他方で翌年に始まる朝鮮戦争（1950 - 1953 休戦）での特需景気に連動して、戦争責任国の反省をよそに「政治・経済・教育」までが戦前思想「追いつけ、追いこせ」（戦勝国論理）へ戻った（伴、2017a）。なぜ大島洞察はかくも深遠であるのか。立証すべき生き方「近代化路線への対決姿勢」の形成論点を要約すれば三点になる。

第一に戦前の大島は、多くの海外遠征を含め1932年ロサンゼルス五輪（三段跳銅メダル）と1936年ベルリン五輪（旗手・6位）で活躍し、それら10年間におよぶ現実把握「激動する国際情勢」を身体髪膚で覚知し終生に亘る大島の思索と行動の原点とした。1934年関西大学法文学部法律学科を卒業し大阪毎日新聞社の運動部記者となる。

第二に戦中の大島は、監督としてドイツ遠征中の1939年9月1日に第二次世界大戦の勃発に遭遇し、選手団を日本へ見送ったあとベルリン特派員となって6年間にわたる欧州戦線全域取材した。とりわけ「死線のドイツ」では生涯の師と仰ぐスポーツの哲人カール・ディームとの対話基地「ドイツチャンネル」を構築する。その間ドイツ語を磨く教科書として1936年刊行のドイツ語版『クベルタン オリンピックの回想』を常備して読み熟し、逐一を終生に亘る対話の心棒とした。

第三に戦後の大島は、終戦15日前の8月1日に日本へ生還するのだが、敗戦国の現実把握「最大の犠牲者は青少年」に触発され記者活動をとおして対決姿勢を貫いた。そして政治記者として身を立てる覚悟であった。この顛末を無視すれば大島意志を検め誤る。

社説で占領地行政を間接法で批判し、検閲中のハン。三度目かには編集長から小言を喰らったが答えは簡単。当局に、日本人にはまだこんなのがいる、と思わせるだけで結構。そう告げて問題を収束させた。（大島、1982、p.176）

当時の大島は前伯林特派員の肩書で「官邸、外務省、文部省」を担当する政治部の看板記者だった。文部省詣ではオリンピック理念を政治・経済・教育へ反映させる狙いがある。ところが1946年11月1日、GHQ（連合国最高司令部）の新聞事前検閲を懼れる社命「古巣運動部への転属」を甘受せざるをえなかった。その葛藤が戦後の大島命題「スポーツで何ができるのか」を凝縮させたのである。

とりわけ大島は技術革新問題に注意した。第二次世界大戦後、戦争を契機に開発された「原子力、エレクトロニクス、オートメ」を平和的に利用して、「過去の産業経済発展の100年」を「1年」で塗り替えた「圧縮革新」が登場する（大島、1976a）。戦勝国論理は指標「進歩主義・経済成長」のもとに時代趨勢を加速させる。他方で敗戦国は追従するほかない。

技術革新は双刃の剣である。プラスの増はその分だけマイナスを生む。わが国で

は(列強志向の明治革命以来、あるべき敗戦革命後も)プラスに性急でマイナス防止をネグった。(同前、補注今次)

大島用語「敗戦革命」の指標は反省「マイナス防止」にある。ところが「ネグった」ため、あるべき実質的な反省「敗戦革命」は進行していない。したがって用語は反語を意味し、論点は前述の二点に起因する。即ち一点は1949年の古橋快拳に触発された時代精神「戦前がえり」を容認する儉安にあって、他は1950年に始まる朝鮮戦争特需景気が誘導した高度経済成長路線へ無批判のまま傾倒した儉安にある。斯くして大島箴言が先見的に戦勝国論理の不作為を看破して展望する。

「…技術革新のマイナス防止を怠るな！  
怠る儉安を許すな！…」

儉安は「政治・経済・教育」の不作為が助長する。戦後の日本体育協会も例外でない。

#### 4. オリンピック後援会事件

1962年の大島随想が1948年から新名称で成立した「日本体育協会」の度重なる不作為責任を追及する。会長は東龍太郎である。

オリンピック東京大会を迎えるに当たっては、理念に向っての努力が要請されていると思う。いつまでもパンパン政治でも官僚主義でもあるまい。スポーツは若いエネルギーを相手として常に生きているのだ。その故に二千年のブランクを越えてギリシャから現代に復活したのだろう。(大島、1962、p.87、傍点今次)

この引用文の出典『オリンピック』(奥付著者名=東龍太郎)を先に詮索しておく。同書の発行日は時の東京都知事「東龍太郎」の二期目選挙のほぼ一年前「1962年5月17日」である。同書には著名人の「オリンピック余話35篇」が収録されており、34篇は選挙応援さながらなのだが、異色の大島随想「もう一度省みよう！」だけは著者「東龍太郎」や当時の体協会長「津島寿一」を「パンパン政治」と敢えて批判した。当事者の氏名は書かれていない。だが関係者が読めば一目瞭然である。

戦争は人格を拘束する。生きるため統治者「アメリカ兵」へ手をふる街娼を「パンパン」と呼んだ。米国のスポーツ文化を彩るチアリーダー「ポンポンガール pompon girl」を振った和製英語である。大島筆舌は占領地行政「戦勝国論理」や権力構造に媚びる人物と団体をパンパン政治と名指して指弾する。実に大島は異名「駿台スポーツボス」をとるほどに日本体育協会を批判し「野党的論評を書きまくった」(北澤、1969)のである。1964年までの体協は通称「駿台」(お茶の水)に所在した。異名「ボス」はその象徴である。理念を追求しない日本体育協会へのこの孤独な対決姿勢は大島の生涯を通じて変わらない。

1958年7月31日、日本体育協会が「日本オリンピック後援会」(会長藤山愛一郎外相)を解散させる怪事件が発覚した(毎日新聞当日前朝刊)。1958年5月13日開催のI O C理事会(東京)で第18回オリンピックの東京招致に向け立候補した矢先である。後援会は体協の財政機関として1954年に発足しており募金の使途不明金の問題となった。しかも「内部でもとかくのウウサ」があった。

怪事件を受けて10月17日に衆院文教委員会が追及する(毎日新聞当日夕刊)。政官界に「金品をばらまいた」とする追及「藤山会長と東体協会長の責任はどうか」に対して、文部省は「藤山会長は昨年七月に辞表を出しており責任はない、また体協との直接関係もないので東会長に責任はない」と説明し、「政官界に対する饗応の事実は聞いていない」と官僚的詭弁に終始した。加えて追及が「後援会設立は東体協会長と田畑専務理事が強力に推進したので直接の関係がある」と糺す。結果として「藤山会長、東体協会長、平山後援会理事長、佐藤同事務局長を参考人として呼ぶ」ことになった。ここに後援会事件「腐敗構造」が一転して東京五輪招致に備える日本体育協会の暗雲「一大事」となる。

本節冒頭引用の大島1962年随想には前半に歴史的現実問題が書かれてある。1934年の第10回極東選手権大会(マニラ)への参加問題

をめぐり「日本の世論が両断」した際、選手にも圧力がかかって辞退者が続出するなか時の体協は毅然とした態度で対応した。

参加が最善の道だと判断して自らの道を選んだわたし（大島）は今でもそれが正しかったと信じている。その判断にわたしたちを到達させたのは、時の体協首脳部であった。（補注傍点今次）

日本の軍部が満州国を「極東体協」へ加盟させるために策動した際、中国の反対に遭って「日本の大会不参加」を主張した。国会も問題にして紛糾するなか体協首脳「岸清一会長と平沼亮三副会長」が参加に踏み切った。とりわけ平沼亮三は選手団長を引き受け理念「スポーツ道」を貫くため「問題の解決は現地の会議で行なう」と主張して臨んだ。

実に大島は、1962年随想「もう一度省みよう！」を以て、「あの頃の若さ（理念追求の意志）がいつまでも生きている」ため、毅然と行動した戦前の「岸と平沼」に照らし戦後の「東と田畑」の理念放棄「不作為責任」を追及したのである。国会が「体協にも責任がある」と追及した二ヵ月後の1958年12月2日、東龍太郎が体協会長を辞任する。理由は「都知事戦へ立候補」のためだった。そのさい新聞では「東竜太郎」として発表された。

妙な面倒な名になると選挙の時不利だというので勝手に変える連中も、最近では随分いる。（大島、1979、p.127）

この皮肉は公職選挙法上の立候補名「東竜太郎」を揶揄する大島回想の筆である。東の雲隠れ辞任から二十五日後の12月27日、定員23名のうち「22人の体協理事総辞職」が発表された（毎日新聞12月28日朝刊）。1名は「東の空席」で、そこには責任隠蔽を図る推薦政党と体協の計算が働いている。こうして課題「体協再建と東京五輪招致運動」と事件「腐敗構造」の解決は先送りになる。

1959年1月10日、三月定期改選までの暫定理事23名が決まる。新理事会は専務理事に旧皇族の竹田恒徳を選び会長を置かずに代理も兼ねた。追及をかわすためである。そのさい田

畑政治は理事に就いていない（毎日新聞1月11日朝刊）。定期改選後も同じ布陣で課題も野放しだった。表立てば後援会事件の追及が再燃することを避けたのである。実に体協がレームダック状態を自演したことになる。朝日新聞の元政治部長だった田畑はこうした手際に長けている。時を経て要請を受け東京オリンピック選手強化対策本部の責任者となる大島が、日本体育協会の依然と続く不作為体質に対決し、1962年随想を以て東龍太郎元会長を代表に見立てて自浄を求めたのである。

## 5. 孤独な東京五輪招致運動

大島の1958年と1959年は新聞紙面と実践行動での孤独な戦い「対決」の連続であった。戦い「布石」はときに人物と組織を名指し反省と自覚を求め実践行動を以て補完する。以下に上述の後援会事件に端を発する大島布石「東京五輪招致運動」について素描する。

### 5-1 なぜ、「1958年」なのか

1958年12月28日、毎日新聞社会部の論説「五輪募金なお疑惑」が追及を深めた。

「…この七月末になって後援会の解散を体協が決議、精算人会をつくって三ヵ月もかかって結論を出したら、役員任期が二年も前に切れていることがわかって解散決議は無効。改めて第三者による調査会をつくったが、疑惑は少しも解かれていない。結局体協は追い詰められて総辞職した感がある。ブランデーIOC会長からも問合せがきているという。これではオリンピックの東京招致も大きな声で叫ばれない…」（傍点今次）

ともあれ追及する側の記者大島だが、一方で東京招致実現に向け独自路線「言動」で戦う意志を表明した。1958年4月7日、大島が「ウワサのある体協」を代弁して書く。

国立競技場は落成式を終わって、いま五月に行われる第三回アジア競技大会の開幕の日を待っている。新装の競技場にはアジア二十カ国千七百のスポーツ青少年が集まるが、これがわが国で行われる戦後初めての総合的な国際競技である。もっ

と遠くをながめると、東京は1964年度の第十八回オリンピック競技をここに招こうとしている。(傍点今次)

上述の論説記事「国立競技場に望む」は当時の日本体育協会と日本スポーツの「理念の足らざる」を補完する布石として書かれた。

立派な住家にはそこに住む人がそれにふさわしい人柄であることが望ましいが、この競技場を使う人、とりもなおさずスポーツする人のスポーツする心が果たしてそれにふさわしいだろうか気になるのである。(同前、傍点今次)

スポーツする心の問題は「選手」だけを意味していない。そこで論説記事が副題「アマチュアリズムの確立」を掲げ核心を衝く。前提的に世界の「体育スポーツ全体の問題」として腐敗構造「スポーツの本質をかき乱すようなこと」の類発を指摘したうえで説く。

もうひとつは商業スポーツの横行である。娯楽興行目当ての商業資本には新しい投資の領域がどんどんふえてきて、純粋なスポーツがひどく侵害され、よろめく結果を招いているのである。(同前)

追及の論点はクーベルタン警句「商取引の場」に連動している。1950年前後の大島は毎日新聞社のプロ球団「毎日オリオンズ」設立に際して徹底的に反対した。社長本田親男を直截に諫言したが埒が明かない。そこで当時のI O C副会長ブランデーに書簡を以て取材し、メッセージ「アメリカの新聞社はアマスポーツの育成に力をそそいでいるが、日本の新聞社もそうしてほしい」を取り付け、共同通信社を介し配信した。この経緯を以て「ワンマン本田社長」と対決する大島は「運動部長」に就くこともなかった(中島、1993)。こうした逸話も含め大島「駿台スポーツボス」の「スポーツする心」の如何ほどかを知らない記者仲間や体協重鎮は一人もいない。上述の追及論点には「本田」に読ませる狙いもある。またその前段と合わせるならば日本体育協会の注意を喚起させる布石でもある。大島の筆勢はかくも鋭く、読み手をも重層的戦略的に想

定する粘着力をもつ。さらに続く。

最近の不祥事はこれを原因としたものが多く、この二つ(神殿の無視と商取引の場への傾倒)の強力な攻撃はオリンピックとスポーツそのものを危うくする危険を感じさせている。昨年ソフィアで行われたI O C総会で、会長のアベリー・ブランデー氏は次のように語った(大島現地取材)。「オリンピックの理想はせき止められている。このまま放置すればあと二、三回のオリンピック競技で崩壊するかもしれない」。(傍点補注今次)

このくだりは「後援会」への対決姿勢をも表明している。そして大島1958年論説記事は当時の世界的課題「青少年育成運動」とI O Cの課題を探り出して駄目押しをする。

崩壊を救うただひとつの方法は正しい体育、スポーツの振興以外にないという結論が出たのである。最近の十一の国際学会はいい合せたように同じ結論を出したが、それは要するに教育を時代に先行させよということであった。さてこうして世界の体育、スポーツ界は、いままでぶつからなかった問題を前にして途方に暮れたように感ぜられた。これはよそ事ではなくてそのままわが国の問題でもある。アジア競技の前に東京で開催のI O C総会はこれらの底辺の問題のうえで盛んに論争を繰り返すであろう。(傍点今次)

ここに大島は「底辺の問題」を探りあげた。なぜなのか。1949年の古橋快拳の波紋は大島造語「蚊帳の釣り手論争」問題を定着させた。1976年の大島回想が経緯を説明する。

J O C首脳の田畑政治氏が選手強化の途上、全幅の信頼でボクを支えてくれた。だから時に当然の困難にぶつかっても計画を比較的順調に進めることができた。だが選手強化とスポーツ振興の方策は二人の意見が違っていた。田畑氏の見解はカヤの釣り手を上げると底が広がるだった。だがボクは底を広げることが第一、その上にエリート・スポーツの構築論だった。

（大島、1976b、p.227）

古橋快拳は1948年に日本水泳連盟会長に就任した田畑の演出があって実現した。実に田畑がマッカーサーGHQ総司令官に呼応した結果なのである。斯くして1949年からの田畑は「蚊帳の釣り手浮揚論」を掲げ司令塔として地歩を固める。爾来、日本体育協会（JOC）は選手養成に偏向し現在も変わっていない。大島の対決する所以がここにある。

10年後の田畑は第3回アジア競技大会組織委員会の事務総長として陣頭指揮を執った。組織委員には「1957年7月」に辞表を出したはずのオリンピック後援会の藤山愛一郎会長も名を連ねている。1958年5月14日から16日まではアジア初の第54回IOC会議が東京で開催された。すべてが1964年東京五輪招致実現に向ける「露払い」なのである。

国立競技場は立派に出来上がった。それは近代的な誇るべき施設である。これを日本の体育・スポーツのメッカとして生かすか、それとも単なる争闘本能の角逐場化して精神的な廢墟にするかはスポーツする心の問題である。（傍点今次）

このように大島は1958年論説記事を以てクーベルタン箴言「商取引の場か神殿か」を再考させるための布石「紙面での戦い」を前もって打っておいた。だが不首尾に終わる。

## 5-2 続発する不祥事

実は組織委員会が運営面で数々の不祥事を起こし世論を逆撫でにしたのである。選手村を都心のホテルに定め各国の不興を買う。キャバレーのサービス券を各国選手団に配る理念無視の接待。定員を大幅に上回る入場券事前販売ミスの隠蔽工作。まだまだある。

「…修学旅行の日程に大会見学を組み入れて早くから入場券を手に入れていたのに、なかへはいれなかった生徒たちの心を傷つけるものはなはだしい。組織委員会に一切の責任があるが、開会したばかりでこんな不始末を露呈するようでは、世界的な規模を持つオリンピック大会の招致など思いもよらない…」（毎日新聞社説、アジア大会運営の不手際、1958年5

月27日朝刊、傍点今次）

こうも主張する社説だが、切り捨てはしない。運営当事者は「失態を会期中につぐなって、よくやった」といわれるように、「スポーツする心」を「とりなおすべきだ」と社説が救済策をも提示する。このように読み解けば当該社説は大島の筆だとみるべきである。

アジア大会組織委員会事務局には後援会事務局佐藤昇も名を連ねている。組織委員会の会長は政府を後ろ楯とする参議院議員の津島寿一である。実のところ後援会事件は国家的事業における大失態「アジア大会選手村（ホテル）の宿泊代未払い」を原因として発覚した（毎日新聞1958年12月28日朝刊）。ならば連動する不祥事における「政府と体協の責任」は免れない。その間に働く構造的な不作為を大島は許さない。斯くして1958年には度重なる論説記事や数次の大型座談会企画で理念を説き、一般記事や社説では追及の手を緩めなかった。他方で救済策を書くことも忘れない。上述の社説もそのひとつである。

## 5-3 時空を往還する実践論理

1958年5月10日、ブランデーJIOC会長が来日した。IOC東京会議のためである。事後はIOC委員諸氏と共にアジア大会の閉会式まで見届けた。大島はその間の動静を見逃さない。5月13日の毎日新聞朝刊に載った単独会見記事「オリンピックの理想」で「東京の招致についてどう思うか」とブランデーに訊き出し、言質「一度はアジアで開催されなくてはならぬ、今回のIOC会議は各国にアジアに対する関心を高めると信じる」を取り付けた。さらには「戦後のプロスポーツ問題をどう考えるのか」も訊ね出した。

「…私はこの種の興行をスポーツとは考えない。むしろサーカスだと思う。私は過去四十年の間、興行を新聞のスポーツ欄にのせるのは不都合だといひ、これをその性質上演劇欄に移すべきだと唱えてきた。アマチュアだけが自由で強制の伴わないスポーツに、公正な戦いの中で楽しみながら精神的な喜びを見出すものなのである…」（ブランデー談）

この回答は前述の書簡取材におけるブランデー返信（1950年10月16日付・関西大学大島スポーツ文化アーカイブス所蔵）の内容に通底する。本田社長の推進するプロ野球経営は1957年から「販売促進に役立つどころか本社経営の不振」へ直結した。会見記事は本田を重ねて諫言したことになる。かくも大島追及は時空間を往還し躍動する。会見ではプロ球団の腐敗構造「選手の引抜きや買収」を指摘し「スポーツする心の乱れ」への対決姿勢についても訊き出し記事にした。

「…米国の教育では真のスポーツがどんなに有益なものであるかについて十分に青少年に伝えていない。選ばれたものも国や学校の名誉のためにスポーツに参加するという精神的基調をおろそかにし、大学生の中にも学校のマークよりも就職やプロになることを考える物質主義がでてきた。オリンピック運動を押し進めてこの物質主義を征服しなければならない…」(同前、傍点今次)

斯くして大島はクーベルタンの意志「アマチュア精神を守れ」をブランデーに代弁させたのである。このさい大島はブランデーメッセージを後ろ楯に「ここに核心がある」と世人へ呼びかけたことになる。実に大島は高踏的核心「オリンピック運動は世界平和の実現にある」だけに閉じ籠らない。視点は現実把握「負の連鎖」に向けられ生活目線「世直し運動」のオリンピック問題を捉える。新聞紙上における現実把握の核心的発信はこの大島の1958年ブランデー会見記事「オリンピックの理想」が初出だと認めてよい。ときに理想と平和の問題は生活世界での世事と等高線上で語られないとき絵空事に終わる。そこにクーベルタンの意志もあって、他方でオリンピック研究の課題のはずでもある。しかるに斯界「学界と文化界」は無頓着に過ぎた。

ところで世界のIOC委員は外交ルートを通じてアジア大会組織委員会の不祥事を承知していないはずがない。不祥事は明確にオリンピック運動の精神に悖る。そうであれば不支持が世界へどのように拡散するのか計り知

れない。他方で五輪招致の国内支持率低下が懸念された。そこへ複合して後援会事件が発覚した。いきおい大島も是非非論で戦わなければならない。体協当事者でない大島には関係者を発奮させるか、世論を味方につけるしか方法がない。そこへ1958年12月21日の毎日新聞朝刊の小さな無記名記事「全世界のメダリストに呼びかけ」が光彩を放った。

オリンピック大会を東京に招致しようと、往年オリンピックで金銀銅メダルを獲得した日本の全メダリスト66人で「日本オリンピック・メダリスト・クラブ」が結成され、この創立総会が二十日西銀座の交詢社で開かれた。高石IOC委員、古橋オリンピック青年協議会会長らも臨席、内外に向かって積極的に動くために今後の方針を決めた。まず各国のメダリストに「1964年に東京で会おう」という趣旨のあいさつを送るなど、来年五月ミュンヘンで行われるIOC会議の空気を有利にする運動を展開するとともに、国内的にも招致の機運を高めるためアピールを行うことになった。(傍点今次)

記事は大島執筆とみてよい。クラブ運営は会長織田幹雄(陸上)、副会長高石勝男(水泳)、十人の理事で構成し、筆頭理事に大島が就いた。実は大島が結成呼びかけ人なのである。古橋広之進を来賓に招いたのには一心同体「スポーツする心」を演出する仕掛けがある。先立って大島はオリンピック運動に賛同する青年有志に働きかけ「日本オリンピック青年協議会」を立ち上げさせていた。同協議会も同じ目的を背負っている。会長は1949年の古橋快拳の当人が引き受けた。絶頂期を過ぎていた古橋はオリンピックメダリストにはなれなかった。だが国内で知らない人は誰もいない。このように舞台と陣容を揃えて大島は行動する。行動は時局を読み切り世界基準で展開される。なぜなのか。大島はカール・ディームとの対話を経てドイツで展開されたオリンピック運動の実践論理のすべてに習熟している。斯くして戦前から培ってきた大島思索の

結集「オリンピック運動」は時代と社会の要請と打つべき現実的な布石を見誤らない。

子供たちにオリンピックを知ってもらいたいとの願いは、この機を外して実現しようもないが、それには核をつくる必要があった。（大島、1979、p.124）

この大島実践論理が「戦う核」として「スポーツする心」を結集させたのである。

#### 5-4 スポーツする心

振り返れば大島「スポーツする心」の展望と布石は1947年を契機に始まっていた。

戦前スポーツの実際は、日本資本主義を母体とする社会環境の生んだ奇形だが、勝利追求に急な余りこれを矯正せずいよいよ変質形に追い込んだ事大主義的失敗はこの際断じて繰り返すべきでない。われわれがスポーツ界に声を大にして叫ぶことは「スポーツは大衆に基盤をもって育成促進せよ」ということだ。崩れかけたピラミッドの尖端（蚊帳の釣り手）だけをながめて回顧し、弱弱しく「復興」をさげふ愚人の夢を継ってはならない。（大島、1947、傍点補注今次）

1947年1月4日、大島は論説記事「スポーツ界の展望」を以て自らに課す命題「スポーツで何ができるのか」を上述のように表明した。そして着手したのが新しい「レクリエーション運動」だった。他方で1945年12月25日、「大日本体育会」（日本体育協会の前身）が前述の平沼亮三を会長として復活した。そこで平沼発議「スポーツする心」がGHQの賛同を得て新しい「国民体育大会」を復興させる。斯くして第1回国体が兵庫などを複合会場として1946年11月に開催された。GHQを説き伏せたのは平沼発意「スポーツによって国民に、特に青少年に、健全娯楽と希望を与える」であった。一方同年11月1日に転属社命を受けた大島が平沼を説き伏せる。斯くして実現したのが1947年における第2回国民体育大会と第1回全国レクリエーション大会の画期的な連携開催だった。このように先見のかつ革命的な大島「尖端と基底の環流」構想が一旦

は実現し、1949年まで三回の連携開催を可能にしたのである。（伴、2017b、p.37）

かくて心ある者は過った戦前のスタートを切り直し、ピラミッドの基底を固めるため一から始めて「れんが」を運ばねばならぬ。視角を変えれば国民生活の中へスポーツ的要素を、文化的素材が織り込まれることだ。（傍点今次）

大島は1947年論説記事にこうも書く。ところが1946年11月26日、平沼がGHQの公職追放に遭って会長辞任となる。実は戦中の大政翼賛団体「大日本体育会」時代のままの名称が公職団体と見做されたのであった。この迂闊は平沼のみの責任ではない。文部省「行政指導」の不備や「東や田畑」をはじめ体協自体にもある。従って1966年の大島随想がその間の不作為責任を追及し「時の体協をつぶしてもよい」と書いたのである。

退隠後も平沼人望は絶大だったので、1948年に財団法人日本体育協会へ転身しても大島「尖端と基底の環流」構想は支持された。しかし1949年の古橋快拳を契機に体協が尖端至上主義へ転換する。そのため1950年には大島構想が頓挫した。おりから朝鮮戦争の特需景気が始まる。時の首相吉田茂までが「これは天祐だ」と政策頼みにした。国民もこの倒錯「ものの見方」を不都合だとは思わなかった。時代精神が戦勝国論理を肯定し逆走したというべきか。体協もまた右へ倣う。

実は予てからの平沼差配で1947年1月22日にオリンピック準備委員会を結成し、大島が幹事に起用され田畑も委員となる。しかし1948年の第14回五輪ロンドン大会への参加は敗戦国日本とドイツに許されなかった。このように暫時を協働した大島も1950年に田畑陣営「尖端至上主義」と訣別する。時を経て1958年と1959年における日本体育協会の不祥事と不作為が大島を奮い立たせた。

発奮が大島「スポーツする心」をして原点問題「クーベルタンの意志」を振り返らせる。即ち「商取引の場か、それとも神殿か」の択一を凝視する歴史的現実問題である。斯くし

て近代オリンピックは「スポーツする心」の選択を要請する文化運動「世直し運動」なのである。しかも大島「オリンピック運動」観からすれば、この自覚のもとにしかオリンピック精神の生活世界への定着「スポーツ元年」は始まらない。実にクーベルタンの意志とはオリンピック開催都市を試金石として世界での「スポーツ元年」の萌芽を期待する壮大な布石だったのである。日本ではどうなのか。

## 6. 日本のスポーツ元年

オリンピック憲章は招致運動に際してIOC委員への個別の働きかけを厳禁している。そのため招致委員会は手詰まりだった。そこで大島布石「メダリストクラブとオリンピック青年協議会」が離れ業を展開することになる。逐一を見定めた田畑が大島に懇請する。大島回想に訊く（大島、1976b）。

東京招致運動が本格化してきた1959年春、田畑氏からボクにモスクワはじめ東欧のIOC八票を獲得するために飛んでくれないかとの要請があった。

そのため大島を体協理事とJOC学識経験委員に推薦しかつ招致委員会へ迎え入れた。大島も蚊帳の釣り手論争を一時離れて受諾した。事の進捗は現地ミュンヘンから書き送った1959年5月30日の大島論説記事「IOC会議の舞台裏」に訊くのが適切であろう。

会議直前に私は東欧を回ってきたが、現地ではっきり東京の優勢を知った。こんな地ならしができていたうえに最後のダメ押しもすばらしかった。二十五日に行われた平沢和重代表の演説は完全に他を圧倒した。簡にして要を得た演説で、わずか十五分間。勇敢にも従来の型を破って持ち時間の四十五分をフルには使わなかった。この戦略は高石IOC委員の指示によるものだった。（傍点今次）

圧倒は教科書『小学校国語六年上』をかざして「日本では小学生にもオリンピック精神が説かれている」と力説した相乗効果に拠る。教科書には「五輪の旗」と題する一文が載っ

ている。一文は大島著書『オリンピック物語』（1951、あかね書房）をもとに監修者「志賀直哉」が大島の協力を得て抄出したものである。大島論説記事は自分事なので経緯を書いていない。経緯を知る毎日新聞最高顧問の高石真五郎が平沢演説を創出させたのである。そうであれば大島の東京五輪招致運動は既に1951年に始まっていたことになる。子供は青年になり大人になる。布石がそこにある。

日本の少年たちは「オリンピックをぜひ東京に」と各国の委員に心のこもった訴えの手紙を送ったが、これが関係者にどれだけの感動を呼び起こしたか想像に余りあるものがあった。高石IOC委員も日本の少年たちが各国IOCにアピールした力（集票）を大きく評価している。オリンピック青年協議会と少年たちが相談して、少年たちはおこづかいを郵便代にして送った。（同前、傍点補注今次）

少年たちの相談には大島の仕掛けがある。こうして「TOKYO 1964」が1959年5月26日のIOC総会で決まった。かくも大島は余人を以て書きえない舞台裏「離れ業」をも筆にする。ここに真相の深層「現実把握」を記事に残す凄さがある。凄さは「あす」への展望をも明示し1959年論説記事を結ぶ。

日本は世紀の祭典をあと五年の後にひかえて、きょうからでも準備をはじめなければならない。六千人の世界の選手を迎えて彼らと最後の決勝まで戦うことこそ、お客に対する一番の歓待だ。

招致決定で日本体育協会も活動再開の必要がある。田畑は先立って1959年4月1日に理事に復帰し、大島の「初の理事就任」も同時だった。ここに田畑「日本体育協会」と大島「駿台スポーツボス」の「オリンピック停戦」が成立する。招致決定二ヵ月後の1959年7月27日、参議院議員の津島寿一が政治工作のすえ空白の体協会長に就任した。

その十日後の1959年8月5日、日本オリンピック後援会の元事務局長佐藤昇が「募金の不正使用」で逮捕され、すべてが不透明のま

ま急転直下の幕引きとなる。実は佐藤昇は戦後まもない贈収賄疑獄「五井産業事件と昭電事件」に連座し前述の国会でも「そんな人物を後援会事務局長に推薦したのは誰か」と追及された当事者である。二つの事件は当時の政官界を震撼させ佐藤は贈賄側だった。結局この仕組みれた「佐藤逮捕劇」は積年のすべてをウヤムヤにする政治決着であった。

しかしながら一連の隠蔽工作を、歴史的決定「TOKYO 1964」の高揚感に包まれた時代精神は追及しなかった。否、むしろ黙認したのでなかったか。かくも近代化「進歩主義・経済成長」路線は人心を一様化させる。実に1892年に始まった「クーベルタンの孤独な哀切」は1959年の日本におけるこの黙認の不条理と等高線上の問題にも向けられていたのである。大島はクーベルタンに同調する。そのうえで「あす」を見通して提案する。大島回想に訊く。

オリンピックが東京に決まると、今度は現実的な選手強化である。結局、少しでも役に立てば、という気持ちで引き受けてしまった。日本のスポーツは依然として経験主義的で科学的裏付けをもっていなかった。さらにスポーツの基盤である青少年スポーツの振興が、政府の間違った政策で横道を走っていた。これをこの機会に何とかできればと考えた。（大島、1979、p.123、傍点今次）

斯くして田畑要請を受け1960年1月18日設置の選手強化対策本部の副本部長に就く。本部長は田畑だが、組織委員会事務総長も兼任していたので、大島が現場責任者として迎えられた。総仕上げ期の1963年4月24日から大島が本部長となって陣頭指揮を執る。結果は「金メダル16、世界第三位」。成果は大島の率いた選手強化対策本部の功績であり、日本選手団長大島の偉功である。いまだにマスコミも結果から判断して「そうだ」という。ただし本稿の議論してきた大島布石については語られることがない。なぜなのか。

東京大会はほんのステップストーンに過ぎなかった。わたしたちは大会が終わっ

た途端に、目の前いっぱい二本の柱、すなわち「競技力の今後の強化向上」（尖端）と「国民スポーツの振興」（基底）がとてつもなく大きな姿で迫っていることを発見したのです。（傍点補注今次）

1965年1月1日終刊の機関誌『オリンピア』に大島はそう書く。そして1965年3月31日の刊行『東京オリンピック選手強化対策本部報告書』を置き土産に体協理事を辞任した。そのさいJOCは大島を名誉委員に遇している。一方で1947年に打ち出した大島「尖端と基底の環流」構想を具体化するため本拠地を大学へ移す。斯くして1965年4月1日から大島は大阪体育大学の副学長兼教授となる。ここに新たなる大島「日本のスポーツ元年」構想が始動した（伴、2017b、p.5）。

1965年10月25日、大島「日本のスポーツ元年」宣言が戦う姿勢を改めて表明する。

我国ではスポーツの教育における地位はまだ低いといえる。スポーツは人類の共通の文化財というのにこれでは文化国家といえません。オリンピックが近代に芽をふいたのは何故か、キリスト教とオリンピック精神の歩みよりをどうみるか、学界と文化界も考えてほしいものです。やがてスポーツはそのあるべき地位をとりもどすでしょう。それまで待てないのが、現場にある我々の考えです。次の世代の担い手である子供、青年のため、日本の政治、経済、教育を動かすのが私の仕事です。（大島、1965、傍点今次）

大島にとって「スポーツ・レクリエーション・オリンピック」は青少年育成運動の教育施設でもある。しかるに大成功を収めた1964年東京五輪後も日本体育協会は不作為に終始し選手養成にしか目を向けなかった。またオリンピック運動の総本山JOCはクーベルタンの意志からすれば本末転倒「金メダル至上主義」に墮し、そして政治と経済は成長路線にしか関心を示さない。そのうえ教育と社会は生活世界に巢食う過剰な対象論理に無頓着である。なぜなのか。これでは1965年の大島が詰問し

た「文化国家」にはなりえないし、「日本のスポーツ元年」も順当に定着しそうにない。とりわけ「体育学会」と「体育協会」はこの問題から逃避してはならない。

## 7. 結語

明治革命以来の日本社会は、西欧文化の受容にあたって、由来となる歴史的現実問題「対決経緯」を無視したまま、即ち文化発祥の原点問題に注意することなく直接に目に見える表層面の有用性論理を選択基準にしてきた。結果的に「単なる模写」を直輸入したことになる。スポーツ文化も然り。しかもその過程には享受者の生き方「ものの見方」を無自覚のままに変容させる「三重の危機問題」が封じ込まれていた。即ち西欧文化の鵜呑み、その無批判、さらに前者二点を野放しにする儉安である。そしてこの三重の危機問題「鵜呑み・無批判・儉安」は現代社会にあっても払拭されていない。(伴、2017b、p.17)

実は三重の危機問題の捉え方において生き方「ものの見方」の両極化が始まる。議論では典型事例として一方に「東龍太郎、田畑政治、本田親男」を、他方に「大島鎌吉、平沼亮三、クーベルタン」を採り上げた。前者群は近代合理主義「知性原理」の視点「対象論理」で「スポーツ」を物象的に捉え、後者群は生命原理の自然児「スポーツ」を尊重し愛好する視点「実践論理」から周縁現象を捉える。両群の相違は「スポーツする心の問題」にある。しかし現代社会では前者群を近代化路線「成長志向」の象徴として肯定的に評価する。ここに近代合理主義の隘路がある。体育学研究はこの問題に無頓着でなかったか。大島は前者群を顕わに追及した。もとより現代社会へ浸透する過剰な対象論理「物質主義」へ対決する布石であって歴史的現実問題「不作為」を指弾するためであった。この先見性を無視するとき、大島「日本のスポーツ元年」構想はその具体化の道を閉ざされる。

対象論理「知性原理」は例えば物象化という視点へ偏重するとき生命原理「スポーツす

る心」を歪めてしまう。ところで近代政治、近代経済、近代教育は、その対象論理を理論構成の基盤に据える。ゆえに1965年の大島は「政治・経済・教育」を動かすと表明し、改めて大島「尖端と基底の環流」構想の具体化に向け乗り出したのである。斯くして大島は尖端だけに視点をおく関係者を許さない。だが批判するだけでなく展望も明示する。

思うにカヤの釣り手論争（大島と田畑の対立）は、どうやら双方が両極端に立って互いに主張を譲らなかったので延々とつづいた。そして中間地帯が大きく広いことに気づかなかったようだ。(大島、1976b、補注傍点今次)

実にあらゆる領域の「中間地帯」が自覚しないことには、現代生活に潜む三重の危機問題「鵜呑み・無批判・儉安」を克服できない。反省と課題は「誰」に託されているのか。

NHKが「TOKYO 2020」を念頭において「2019年大河ドラマ」を制作中だと聞く。筋立ては戦前と戦後の観点から「オリンピックにかかわる逸話」をドラマ仕立てで描くらしい。戦後篇では「TOKYO 1964」を主題として「田畑政治」を中心に「オリンピック群像」を描くという。だが大河ドラマが、戦前思想の虚構を無視し、1964年の東京五輪に結びつく時代と社会の成功体験を追認するようにモデル化して脚色されるのであれば、「嘶」として成功しても、NHKの公的責任を勘案するとき禍根を残すことになる。そうであれば大島の問う実質的な敗戦革命がさらに遠のく。

禍根とは三重の危機問題を先送りさせるメディアの拘束力をいう。三重の危機問題は例えばオリンピックを対象論理で捉えるかぎり払拭できない。1949年の大島は日本のジャーナリズムが「戦前がえりした」と看破した。本稿では政治・経済・教育までが再び旧思想に囚われだしたとみておいた。この歴史的現実問題を見落としてはならない。ときに「56年間」の歴史を経て再来する「TOKYO 2020」の意義は何なのか。確かに1935年のクーベルタンが「オリンピック競技を祝福することは

歴史の前に立ってこれをおこなうことである」と言い遣している（大島邦訳書 p.207）。同調する大島は戦後日本の選択してきた歴史的現実問題に対決して筆舌を以て戦った。

歴史の前に立つために日本のオリンピック運動はいま何を照射すべきなのか。そして「TOKYO 1964」とは何であったのか。さらに「TOKYO 2020」はどうあるべきなのか。実にこれら三点の的確な歴史的現実把握にこそ現代日本の問題意識があらねばならない。体育学研究も見逃してはならない。はたして現代日本の「学界と文化界」は近代教育からの脱皮を説く大島 1958 年論説記事の提言「教育を時代に先行させよ」を如何に受けとめるのか。そのさい「スポーツ」に何を期待するのか。かたや現代社会は当面する「政治・経済・教育」に何を要請するのか。そもそも戦後も 1947 年の大島は、近代化路線の負の連鎖に対決して「マイナス防止を怠るな」と警鐘を鳴らし、初手の布石を講じて、自らにも命題「スポーツで何ができるのか」を課した。現代人はこの先見の大島展望に何を訊き出せばよいのか。そのさい体育学研究は如何なる立ち位置を定めて実践論理を説くのか。

#### 引用・参考文献

- 東龍太郎（1962・著者名は表紙表示・奥付では東竜太郎）：オリンピック、わせだ書房。
- 伴義孝（2017a）：大島鎌吉のスポーツ思想に訊く（2）、大阪体育学研究・第 55 号 pp.39 - 48、大阪体育学会。
- 伴義孝（2017b）：大島鎌吉のオリンピック運動（その四）、文学論集・第 67 巻第 1 号 pp.49 - 90、関西大学文学部。
- 第 3 回アジア競技大会組織委員会（1959）：第 3 回アジア競技大会報告書。
- 北澤清（1969）：I O C 委員の二十余年、高石さん・pp.259 - 264、高石真五郎伝記刊行会。
- 中島直矢（1993）：毎日オリオンズ設立に反対、中島／伴共著『スポーツの人 大島鎌吉』pp.28 - 30、関西大学出版部。

Navacelle（1975）：Comments on the Olympic Memoirs, Olympic Memoirs by Pierre de Coubertin pp.3 - 4, IOC（1979）。

- 大島鎌吉（1947）：スポーツ界の展望（下）、毎日新聞（1月4日朝刊）・論説記事。
- 大島鎌吉（1949a）：近代オリンピックの検討、探究・第 10 号 pp.54 - 59、法政大学学友会雑誌部。
- 大島鎌吉（1949b）：スポーツと文化、体育・12月号 pp.45 - 47、金子書房。
- 大島鎌吉（1958）：国立競技場に望む、毎日新聞（4月7日朝刊）・論説記事。
- 大島鎌吉（1959）：I O C 会議の舞台裏（5月30日朝刊）・論説記事。
- 大島鎌吉（1962a）：もう一度省みよう！、東龍太郎著『オリンピック』pp.86 - 87、わせだ書房。
- 大島鎌吉（1962b）：訳者のことば、大島邦訳書 pp.3 - 4。
- 大島鎌吉（1965）：スポーツのあるべき地位、新聞『関大』・第 127 号、関西大学校友会。
- 大島鎌吉（1966）：当時のレクリエーション協会の抱負、二十年史・pp.77 - 78、日本レクリエーション協会。
- 大島鎌吉（1976a）：日本のスポーツ風土をさぐる、新体育・1月号巻頭言、新体育社。
- 大島鎌吉（1976b）：金メダル 15 個を宣言、昭和スポーツ史・p.227、毎日新聞社。
- 大島鎌吉（1979）：野津さんとの出会い、野津謙著『野津謙の世界—その素晴らしき仲間たち—』pp.122 - 127、国際企画。
- 大島鎌吉（1982）：「オリンピック平和賞」受賞に寄せて、月刊陸上競技・10月号 pp.173 - 178、講談社。
- 大島邦訳書（1962・ディーム編大島訳）：ピエール・ド・クベルタン オリンピックの回想、ベールスボール・マガジン社。

（平成 29 年 7 月 11 日受付、平成 29 年 8 月 4 日受理）